
メモリーズ

神山紗樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリーズ

【Nコード】

N9125V

【作者名】

神山紗樹

【あらすじ】

美幸はバカな山田と付き合って幸せな生活をしていたある日。山田がある手紙を美幸に手渡す。

その手紙は美幸の悲しい過去を思い出させるようなものだった。

(前書き)

咲き乱れんノの番外編です。

待ち焦がれたこの春は私にとっても、大きな変化の瞬間としたいなんて。

神様はそんな幸せな日々をこんな私を哀れに思い与えてくれたとか、他人から見れば自己チューとか思われるだろうけどそう思えたんだ。

「美幸ーおはよー」

親しき友人の菜々と本当に仲良くやってるしクラスのみんなは、漫画とかで見るネチネチした関係をしている訳でもなく全員と仲良くしていた。

だけど、そんなにいい高校の日々をまるでちやぶ台をひっくり返したように変わるなんて。

「あつ、美幸の下駄箱にラブレターが載ってるよ。ずんるいな」
ふと私の下駄箱の中を見るとクローバーが絵がかれた可愛い手紙が綺麗に乗せてあった。

そこに小さな字で

く美幸へく

と書かれている。

だけど、その字には見覚えがあった。

私は周りを見渡した。

2年前（中学3年の時）

「おはよー、今日も可愛いね」

『ちやらい男と思われるが彼女だけは大切にする』がモットーの太田優は私の彼氏である。

クラスの女子から元々遊び人とか言われていたのだが、今はおとなしくしているために私は彼と付き合う事をきめたのである。でも少し心配な所もあるのだが

「京ちゃん昨日のメール見た？ 返事全然来なかったんだけどさ」

「ごめん、昨日塾でバテちゃって昨日メール出来なかった」

こんな彼の会話はしょっちゅうあるので無視です。無視、無視……

「美幸は今日も嫉妬しちゃうねえ」

隣からいきなりそう言ったのはバカの山田である。

山田は成績は中の上で運動神経抜群の陸上部でモテるはずなのだが、超鈍感で天然なのでバカの山田と呼ばれている。そんなバカの山田はよくうちに絡んでくるので少々しつこい。

「別に毎日あんなことやってるし、みんな平等に扱っているっばいからいいんじゃない？」

コイツの前では上から目線が常識。上から当たらないと調子に乗って何言うか分からないから。

「しっかし大変だな。モテ男の彼女としては」

相変わらずムカつく奴である。

そんな毎日が続くと思われていたのだが。

「ねえ美幸ー今日さゲーセンいかない？」

そう誘って来たのは、クラスのギャル集団である。別に予定なんかなかったし大人数も嫌いじゃないから行くことにした。そこにはあのバカの山田もいたけれど、まあ無視しときゃいいやという軽い気持ちだった。

「ねえ美幸聞いているの？」

私は近くのファーストフード店で10数名いたギャル集団を3つのテーブルに分けて座っていた。

なのに何故であろうか。

「なんでうちがバカの山田と一緒にの席なのよ!？」

思わず立ち上がり叫んでしまった。周りは冷たい目どころか仲間
はゲラゲラ笑い始めるし、面白い奴だとか思われたんだろう。

「まあまあ。ゆっくり話そうぜ」

そう言いだしたのは、あんまりしゃべったことのない中山さんで
あった。

「美幸ちゃんはその優と付き合ってるでしょ？」

急スツと言うものだから思わず聞きなおそうとしてしまった。

「そう言えばさっきあいつあそこにいたよ」

指の差す方向を見るために後ろを見ると一軒の花屋があり、一見
見ただけではおしゃれな花屋とは思えない。しかし、そこから優が
出てきたのだ。しかも見覚えのない女性と一緒に。

「ほら言った通りでしょ。あいつはああいう奴なんだって」

まさかの浮気現場に遭遇してしまった私。なんてバカなんだろう。
「まだそう決まったわけじゃないって。あいつの言い分も聞いてや
らなきゃ分からないでしょ」

随分な正論であったのだが私はそんなことしても彼が言い訳しか
言わないような気がして、もうどうでも良くなった。

「それよりさ」

その時私は彼の事を信じられることが出来なくなった。

あれから私は学校に行っても何も上手くいかなくなって、学校に
行くのも不定期になってきた。

そして、ついに3ヶ月後。私は不登校になった。

友人が家に来るものの部屋へ通すまでは許可せずに部屋で漫画に
ゲームなどひきこもり生活を続けていた。

それからいつだったのだろうか？ 日付の感覚がなくなりいつだっ

たか忘れてしまったのだが、その日は山田が家に来ていて私の弟と遊んで行った日。

突然、部屋の戸をたたく音がして戸を少し開けるとそこに山田がいた。

「俺やつぱりお前に一番に伝えたい」

「何？」

少々の期待を持った私は声を小さく言った。

「優が死んだんだよ」

その優しい声には私は頭の中のものがグチャグチャになったみたい
に混乱した。

今までも母親が同じようなこと言ってたけど、まさか本当にとは
思わなくて部屋から出そうという口実だなんて思っていた。

でも山田がこんなに本気の目をしているところは初めて見た。

「優ね、病気で死ぬ前に美幸に会いたいわって言ってたんだよ。なん
でお前は……」

言葉が詰まったと思ったら、手で顔を隠してその間から光るもの
が見えた。

「私はもう優と別れたんだよ」

「お前はそう思ってたかもしれないけど、優は本気だったんだよ。

お前のことをずっと好きでお前に会いたいわって思ってたのになんで
そんなことも分かってやれないんだよ！」

声が廊下に響いた。そのとき私は、本当にバカだよって分かった。
こんなバカな山田に怒られるなんて私ってなんてダメな人間なんだ
ろう。

「優は私のこと　ずっと好きでいてくれたんだね」

「……うん」

自分の気持ちを捨て切れずにいた私はわざとその思いを隠してた。

「無くなってから気づいてももう遅いよね」

私はいまやっとなりの大きさがやっとなんだった。

「おお、美幸ーおはようっ！」

久々に学校へ来た私はなんにも変わってない事に気がついた。優が
いなくて寂しくなったけど、私は今を生きていくことを決心したん
だ。

「おはよう中山さん」

中山さんはまるで何もなかったかのように明るくふるまってくれ
た。

「おい！ そろそろ中山さんじゃなくて名前の方で呼んでくれよ」
「うん。分かった、麻衣華ー」

「ただど大事な私の何かを失ってしまった気がした。
それに

「やっと学校来てくれたな。ここで一步踏み出した美幸にお祝いだ」
「ん？」

「俺、お前のことずっと好きだったわ」
「いや私の思い違いだったようだ。」

「いいわよ」

「ただどまだ私の心の傷は消えてない。」

私は菜々の横をすつと通りぬけて無我夢中で走り出した。

「山田！ なんでこの手紙……」

その手紙を山田の仕業と即座に分かった私は山田に叫んだ。

「この前掃除してたら見つかった」

あまりにもそっけない返事に私は余計に腹が立った。

「私はもう優のことを思い出さないように生きていこうって思った
のに……」

「今まで優を思い出さないように生きてきたからか余計に恋しくな

ってくる。このままじゃあ山田より優のことが好きになってしまう。そんなんじや私は生きていけないって分かっているから。

「お前、優のことをまだ忘れられてないだろ。俺は嫌なんだよ、いつまでも優の次ってことが」

そんなこと……って思ったけれどその一言が改めてみるとあまりにも心に響いてきて、私はそんなバカな山田を見て我に返ったような気がした。

「じゃあこの手紙、読むね」

バカな山田に大馬鹿だつて思われてもいいからさ、私の顔を見てほしくはなかった。

「まだ泣くなよ、優の手紙見てねえのに」

そつと私の頭に手を置いた奴の優しさにやっと気づいた。もう涙でグシャグシャの顔だけど、山田の顔をそつと見ることはできた。それから山田が私の肩にそつと腕で包み込んでくれた。

山田の制服のシャツが段々と涙でしみていくのが分かったのに何も言わずにふつと優しい顔でこつちを見ていた。いままで優のことを忘れたことはもしかしたら一度もなかったのかもしれないけど、今は優の顔が浮かんでこない。

目の前にはただバカな顔した奴だけがいる。

「好きっ」

ただ一言ためらいなく口から出た言葉は余りにも単純で自分でも笑えて来るぐらいだった。

「おう」

また返事がそつけない。だけど今の返事がそつけなかったのは、ただ山田が可愛いくらいに照れてるからって私には分かったよ。

放課後、家の小さな一室で私は手紙の便せんを覚悟を決めて手に取った。

「優です。いきなり手紙だなんてかつこつけてるとか思われちゃつてもしょうがないけど、俺は美幸に合うことが怖くて手紙を書いたけど、ただの弱虫だ。」

「伝えたかったのは、この前の件でケンカしちゃったから謝りたかった。」

「ホントにごめん。」

「お前はすごく傷ついたのは分かっていたのに謝れなくて。」

「ずっと言おうと思ってお前が一人になった時とかに話掛けようって思ってたのに、美幸は俺に会いたくなくて避けられていることが身にしみて分かったよ。だけど過去に戻ろうって言ったってそうはいかないんだと思ったから、ここの病室でお前に手紙を書くことを決めたんだ。」

「病気になってやっとお前が恋しくなってきたしまった。大事なものがすぐそばにいない悲しさを思い知らされた気がした。」

「もし俺が死んだんなら、俺のことなんか忘れて本当に好きな人を見つけて良い日々を送って欲しい。できれば俺みたいに遊び人じゃない人にしろよ。俺みたいに意地張ってなくて優しく、自分たちのことをはつきり言える人に。」

「やっぱり俺は彼氏失格だな。」

「だからさ、俺は天国で良い女と付き合うよ。それでお前はここで良い男と付き合ってるよ。で、もしばあちゃんに美幸がなって天国に来たなら、もう一度俺と付き合っただけで欲しい。」

「あと思っただけでさ、山田って良い奴だからお前と釣り合ってると思うよ。友人でもきつと楽しいと思うよ。」

「じゃあこれ以上書くと涙が出てきそうだから、そんなの俺に似合わないし、最後のさようならを。」

「天国で待ってるっていうのはマジだからな。お前の人生を見守ってるよ。」

「強がってる中にも優の優しさがにじみ出っていて、私は懐かしさに」

浸っていた。

優は本当は全部分かっていてくれたんだ。私は優と会わなくて引きこもってた数カ月にもしかしたら、優が迎えに来てくれるかもってずっと期待してて。

でも部屋から一步も出ないぞって強がってたのは私の方だった。

もしあの時部屋から出て優に会いに行つて「ごめんね」の一言を言えていたならこんなに胸が苦しくなることもなかっただろう。

だけど優が今を生きていくって決めたように私も今を信じる。ただ今だけ、山田に悪いのは承知で泣かせてほしい。

「優……好きだったよ……」

心の中で呟いたはずなのに、思わず言葉に出てしまった。

でもこれが今の気持ちだけどこんなことを思っているても進まない。そっだ。

私は過去でも今でもなくって未来を信じよう。

きっと明日には山田のことを本当に好きになってる。

こう思えたのは優のおかげで　ありがとう。

「美幸ー今日隣のクラスのギャルと女子会すんだけど来ない？」

「ねえ美幸、私今日暇なんだけど遊ばないかな」

麻衣華と菜々が一緒に誘ってきた。

あれから毎日が余りにも楽しくてたまらない。

「じゃあさ、麻衣華の女子会に菜々も一緒に行こうよ」

そう言うのと2人とも不貞腐れ顔になってる。麻衣華と菜々は仲が悪くて犬猿の仲だけど麻衣華は本当は良い子だし、それを分かってくれるといいから。っていうかきつと菜々なら分かると思う。

「んじゃ、俺も」

山田が私たちの話に入つて来た。

「男は女子会に入ってくるんじゃないよ」

そう言うのと麻衣華がギャハギャハ笑いが教室に響いている。

「山田はバカだなあー」

私が言つと菜々がこのこのと私の腕をトントン押してくる。私は照れないように我慢してるのに山田は真っ赤な顔して変な走りですわって行った。

「しょーがないなあ。今日は麻衣華の奴にいったらつか」
珍しく、菜々が雰囲気に乗せられて上機嫌。

優がいなくなった世界にも、幸せがあふれてるよ。

楽しい日々がずっと続いて欲しいって思うよ。

それからね、山田と付き合つて……あいつホントバカだよね。

私もいつかばあちゃんになってヨボヨボになったら、ヨボヨボな優に天国で会つてさ一言謝りたいな。

それまで山田に恋していいかな？

私は山田も優も好きだよ。

(後書き)

咲き乱れんノの番外編として書きましたが、少し長くなってしまったと思います。

読んでいない方は咲き乱れんノも読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9125v/>

メモリーズ

2011年8月20日03時35分発行